

やや後になってから思うに、実に危険な遊び、いや威信を賭けた喧嘩であった。

何故僕はその当時、あれほど夢中で人に向かって、思いっきり石を投げつけることが出来たんだろう？

それは簡単な理由からだ。

ただ、相手の顔が見えなかったから。相手に知った子供が居なかったからだ。

石合戦とは、僕が足柄小学校6年の頃、芦子小学校との間で行なわれた、双方に向けた石の投げ合いのことで、石が当れば大怪我になるという心配はあったが、まあ先ず大丈夫だろう、などと思っていたに違いない。

その頃僕が最も得意にしていたのが、野球のピッチングで、小学校に入学する前から、小さな石ころを芯に布地をぐるぐる巻きにした手作りのボールは手放せなかった。

そして、その投擲力を得意に発揮したのが、石合戦だった。

(他校との石合戦)

足柄小学校傍の小川をまたぐと広い畑が三百メートルほど広がり、その先に芦子小学校がある。そこに至る一本の畦道があった。

両校にこれといった反感やトラブルなど無かったと思うが、何故か、その一本道を二、三十人が一列になって中ほどまで走って、芦子小めがけて手にした石ころを思い切り投げつける、それが済むと、今度はこちらが引いて、相手校がこちらに向けて投げってくる。交互にシーソーゲームのようにやる。

勿論、双方の児童に届かない距離の投擲で、まさか怪我などには至らない、そう思っていた。

しかし被弾した者が出ていたのだった。額に石を受けて血を流し大きなコブをつくった仲間がいたのだった。

だったとは、被害者は何と長年親しくしている友人で、ごく最近の二人の思い出話で知ったのである。それもかなりの怪我を負ったという。

今更ながらだが、危険な行為であったのだ。

石の投げあいには、一種の馴れ合いのように行なわれたようだが、一体何の理由があったのだろうか？きっかけがあったのだろうか？

理由は解からず仕舞いだが、恐らく喧嘩というより戦争ごっこ、遊び感覚であったのかも知れない。

数十年後の今のゲーム機で興ずる、格闘や戦闘などの遊びと同じようなものか？

石合戦の場合、怖いのは生身の身体に危険が及ぶことだ。石が当たれば、とんでもない怪我をするに違いない。でも、距離は離れているし当ることは先ず無い、大丈夫！などと思っていたに違いない。

「未必の故意」という法律用語は、こういう場合に使われるのだろうか。石の投げ合いは、相手に友人やら知った子が居れば、そんな行為には及ばなかったはずである。日常のフィールドの外側で、知人や友人のいない、つまりは顔が見えず、知らない者に対しては敵・味方といった関係で色分けしてしまう戦時体制下の風潮に染まっていたのか。時代がもたらした荒んだ気分であったのだろうか。

そして現代、顔が見えないと暴拳に及べるのは、無責任な行為を生むネット社会の、それに似ている。

踏み込んで思うに、友人知人の居ない、知らない世間に対して、ちょっとした齟齬や偏見や蔑視、果ては憎しみまで抱くようになってしまうのは、昔も今も大人も小人も変わらない日常のことだ。

さらに、悠久の昔から今もお争いが耐えない世界も、相手の顔が見えないところで、曲解し、愚行に走って、果ては戦を起す。

すこし飛躍するが、同じ地球の一員として、お互いの顔が見える距離に相寄って、相手の立場やら都合やら思いやらに心を寄せることが出来れば、暴力は控えたり、少しは変わってくるのではないだろうか？

さらに大仰に、一人びとりが平和へ尽力できる基本は「相手を知ろうとする気持ち、できればリスペクトする努力」なのでないか、などと、その昔全学連の効果の無かったデモの渦中にいた者の繰言のごと、つい口をついてしまう。